

女性医師として働き続けるための問題点

女性が同じペースで働き続けることを困難にしているのは、そのライフスタイルの多様性と価値観によるところが大きい。結婚や出産、育児、介護は女性に家庭内での新たな責任を生じさせる。この責任は身内や民間支援に多少は振り分けることはできても、やはり主役は女性である。社会や職場はいまだこの多様性に対応しきれておらず、公的支援は圧倒的に足りない。現実には女性医師本人が、自分の働き方に合った数少ない支援を膨大な情報の中から探し出すだけで、疲弊するようにできている。しかも、非常に私的な問題なので、公私の別をわきまえている女性医師ほど、周囲に相談することなく自分で抱え込んで、追い込まれ、性急な判断を一人で下す。加えて、女性なら、経済的に困窮するのではなければ、別に仕事の継続にこだわらなくてもいいのではないか、という価値観がある。大切な家族を自分の仕事のために他人の手にゆだねること自体に抵抗を感じる女性医師も多い。なかなか難しい問題なのである。

社会的支援体制が急務であることは明白であるが、これは政治の問題なので置いておく。女性医師とその周囲の双方で何かできないかを考えたい。まず、女性医師側は仕事へのプライドを持ちつつ自分の能力、周囲の支援、働き方（責任の度合い、労働時間の調節）、この3つのバランスを人生の一時期にうまくとることが必要になることを、若いうちから知っておく必要がある。その時期に備えて、人格的にも、知識・技術的にも、周囲が支援してあげたいと思える人材になるための努力を常に惜しんではいけない。また、医療はどの場面でもチームプレーであり、医師はそのリーダーである。ここに男女の別はない。自分にふりかかってくる責任は、どんなに辛くても果たさなければならない。仕事へのプライドや向上心を失った女性医師と一緒に働くことで周囲に負担がかかる場合、本人が必要とする支援が望めないのは容易に想像できる。

一方で周囲は、女性医師が私的なことに時間をとられて、支援や働き方の調整を必要とする時期が人生の一時期にあることを理解し、その組織での支援体制構築を手伝ってあげてほしい。また、性急な判断を下そうとする有望な女性医師をみかけたら、将来を見据えた選択の重要性和「細く長く」頑張る道をアドバイスしてあげてほしい。支援が必要だった時期を乗り越えた女性医師が、本人たちの理想の医師像に近い形で再び働きだすケースが続けば、女性医師という存在そのものが職場での信頼を勝ち得て、次の女性医師の働き方の選択肢が広がる。組織は活気づき、支援は男性医師にまで広がる。こうした好循環が職場、社会でつながってほしいと切に願うのである。

多田 弥生

(帝京大学医学部皮膚科学講座主任教授)